

踏まね踏まれても生き返る

NO.42 2026.4.25

COM-MATCHAN

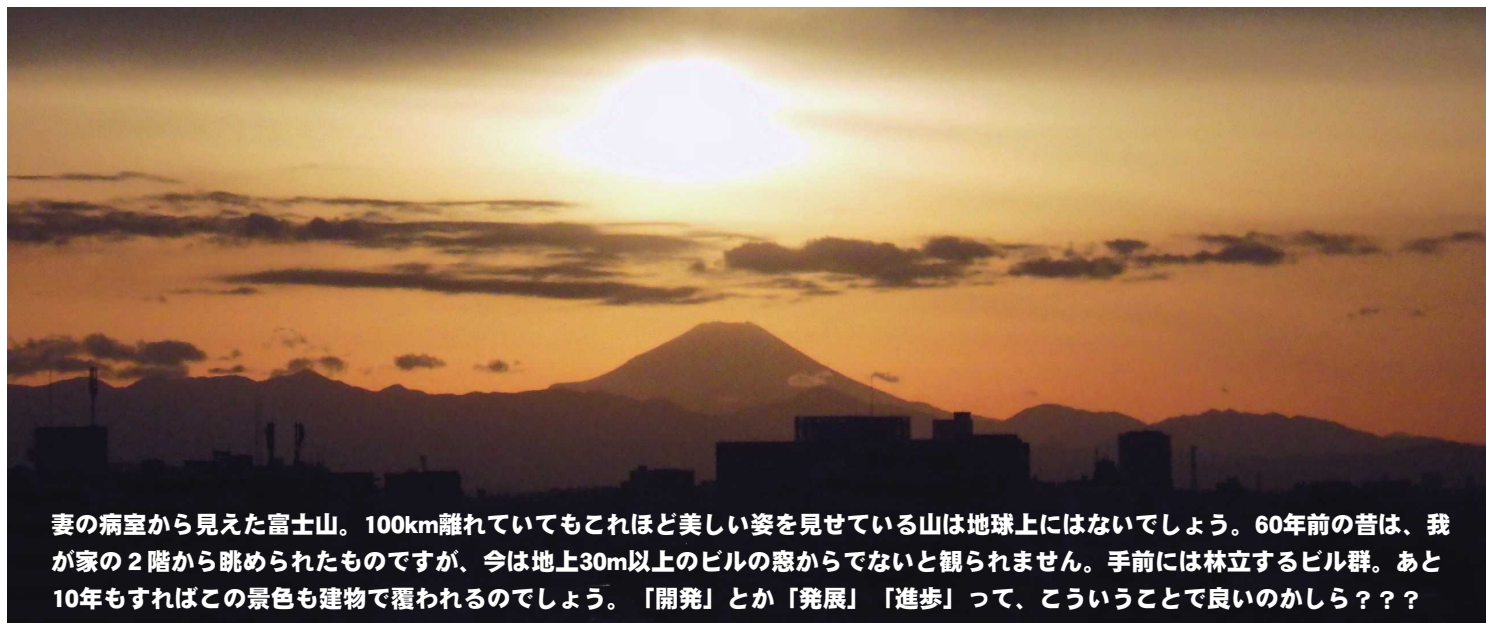
ざっそう つうしん いたばし雑草通信

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。

編集：発行 木村松夫
090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com
com-matchan@hotmail.co.jp

板橋区立エコポリスセンター「かんきょう観察員」登録
地域自主活動グループのWEBページでも閲覧できます。ほかのグループのレポートも見てください。



妻の病室から見えた富士山。100km離れていてもこれほど美しい姿を見せている山は地球上にはないでしょう。60年前の昔は、我が家の2階から眺められたものですが、今は地上30m以上のビルの窓からでないかと観られません。手前には林立するビル群。あと10年もすればこの景色も建物で覆われるのでしょうか。「開発」とか「発展」「進歩」って、こういうことで良いのかしら???

80歳になりました 人生の終(ま)いは悔いのない老々介護 新人生でつくしたい

昨年末の12月28日付けでNo41を発行して以来、実に4か月ぶりの本紙発行です。

昨年末に連れ合い(妻)の食道がんが発覚して、いろいろな検査ののち、今年に入って入院手術。食道の下半分と胃の上半分を切除して繋げるという外科手術の中でも難しいものでした。手術は成功したものの、次から次へと様々なトラブルが発生し、1月の終わりに入院してから退院が3月はじめという異例の長期入院生活でした。

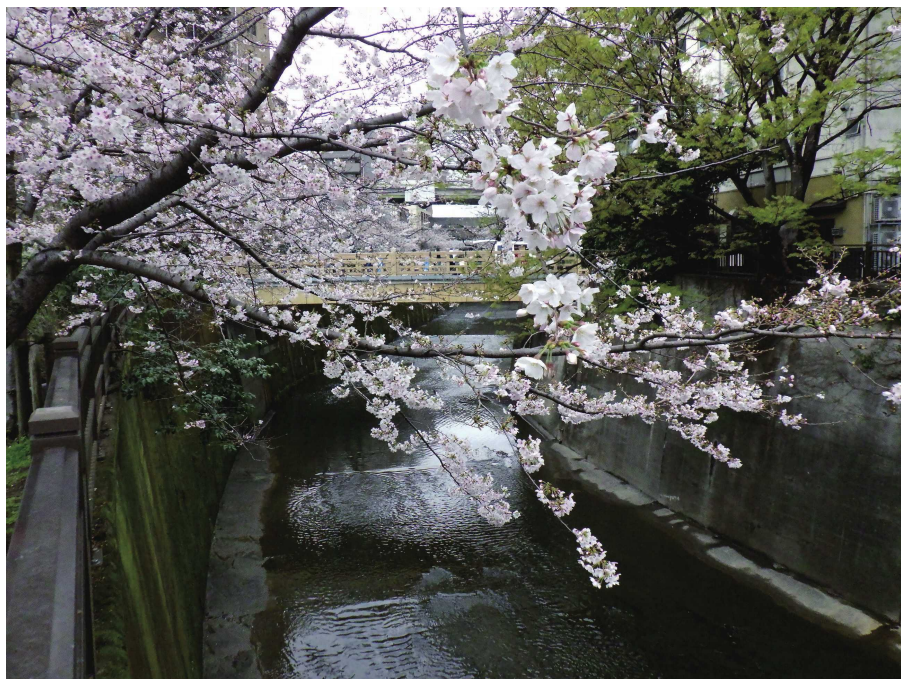
自宅療養に戻っても、肺炎の兆候が現れたり消えたりする予断を許さない状態が続きました。治療の第二段階である化学療法(抗がん剤投与)が始まったのが4月に入ってから。それも、白血球値が下がらないので抗生剤投与が続いて、予定の倍の期間がかかりました。ようやく退院出来て、今は、チューブを通した栄養補給で、案外元気に生きています。わたしの看介護はチューブによる栄養補給の管理(1日3回、各2時間半、チューブが目詰まりしないように気を配る)ぐらいで、あとは掃除洗濯、買物、食事づくりの家事全般(加えて、夕方に孫を学童保育に迎えに行きママが帰宅するまでの見守り)ですが、いずれものすごく大変という訳ではありません。

でも、ほかのことごとくには気が回りません。ひとりで言う近所の野草観察でさえも、ただ観るだけ。記録を取ったり発表することなどは、到底その気分になりません。

気が付けば、4月25日で満80歳になりました。いつかは老々介護の日が来るだろうことは分かっていたはずなのに、そうやって初めてこういうことなのかと実感しています。でもね、これもまた人生。どうせならとことん付き合ってみようじゃないかと、80歳の新しい暮らしに向かって船出です。

パソコンに向かって頭を使う仕事ならできるので、子ども時代の風景を思い出し記録に起こしたり、近代以前の日本の人々のコミュニティのあり方を歴史資料で見直したり、少し余裕ができたなら武蔵野台地の崖線巡りを再開したいなどと考えています。『いたばし雑草通信』は細々と続けます。

橋の名に残された昔の板橋宿 今、その歴史を思い越す人はいるのだろうか？



北区滝野川から板橋区加賀を遡（さかのぼ）って中板橋方面までつづく石神井川緑道の桜並木は、都内でも名の知れた花見ルートになっています。左の写真は旧中山道にかかる「板橋」を下流から眺めた風景。板橋区本町と仲宿の境界にかかっているのが「板橋」です。

区名の由来となっているこの橋は、江戸のまちから京都に上る最初の宿場として有名です。当時の地名は日本の中心地東京の都に近い場所を「上=かみ」、町の中心を「本=ほん、もと」とか「仲」と呼んでいました。現在の町名はこの辺りが宿場の中心だった、その名残と考えてよいでしょう。

でも、現在に伝えられているのはそのことぐらいです。

上の写真の撮影位置の後ろ側＝川下方向へ数10メートルのところにかかる橋は「番場橋」、さらに200メートルぐらい下流の現帝京大学医学部附属病院近くの橋は「御成橋」と言います。

「番場」とは江戸時代の町人の自治的組織で行政の最末端を担う「町（ちょう）役人」が駐在する「自身番」が置かれていた場所なのではないかと想像できます。ちょうど、宿場の中心に位置しているの、なおさらそうではないかと思われま。さらに、「御成橋」って何なのよ！？ この辺りに天皇とか将軍がお出ましになったのかしら？ 宿場街のすぐ裏手は畑か原野だったのだから将軍の鷹狩ぐらひはあっても不思議ではないのですが、さらに川下に下った「加賀さくら橋」辺りからが加賀百万石前田藩の下屋敷だったらしいので、もしかしたら江戸へ参勤してきた加賀の殿様が下屋敷へ入った通路がここだったのではないかと、これはわたしの想像だけれど、まったく絵空事でもないと思います。

60年前、石神井川は溪谷だった

さてさて、この石神井川の今の姿は1970～80年代の河川改修が行なわれて以降のわずか50年ほど前からのことなのです。その昔は、どんな感じだったのか？ 右下の写真が分かりやすいでしょう。

北区王子の音無橋で、今でも同じ形です。でも、橋の下を流れる石神井川の様子は大違い。昭和37（1962）年、関東地方を襲った狩野川台風で洪水に見舞われた惨状を記録したのですが、音無橋の手前に、川の中州に建っている料亭へ渡る橋があります。川の対岸は木々に覆われた崖になっています。

当時の石神井川は全域でこうした小さな溪谷を刻んでいて、橋の袂には必ず川面に降りるけもの道がありました。昭和30（1955）年代になると、川は産業廃棄物と生活雑排水で汚れ、悪臭が漂っていました。それでも木村の子ども時代にはよく川面に下りて遊んだものです。小さな魚が泳いでいました。現帝京病院前の崖に真っ赤な花が咲いていたのが今でも目に焼き付いています。

水質悪化と洪水被害の頻発により、1970～80年代には改修工事が始まり、川筋を直線化して三面コンクリート貼りの現在の姿になりました。川の両岸に緑地が交互に点在していますが、これは湾曲部分を埋め立てた跡です。

川岸の緑道にはソメイヨシノが植栽されましたが、その寿命は数十年。江戸時代から百年以上も続いてきた景色も現代ではすぐに消えてしまう「開発」＝「破壊」の時代になってしまいました。



昭和37年（1962）年、狩野川台風で氾濫した石神井川
北区行政資料センター所収 倉田正義氏撮影